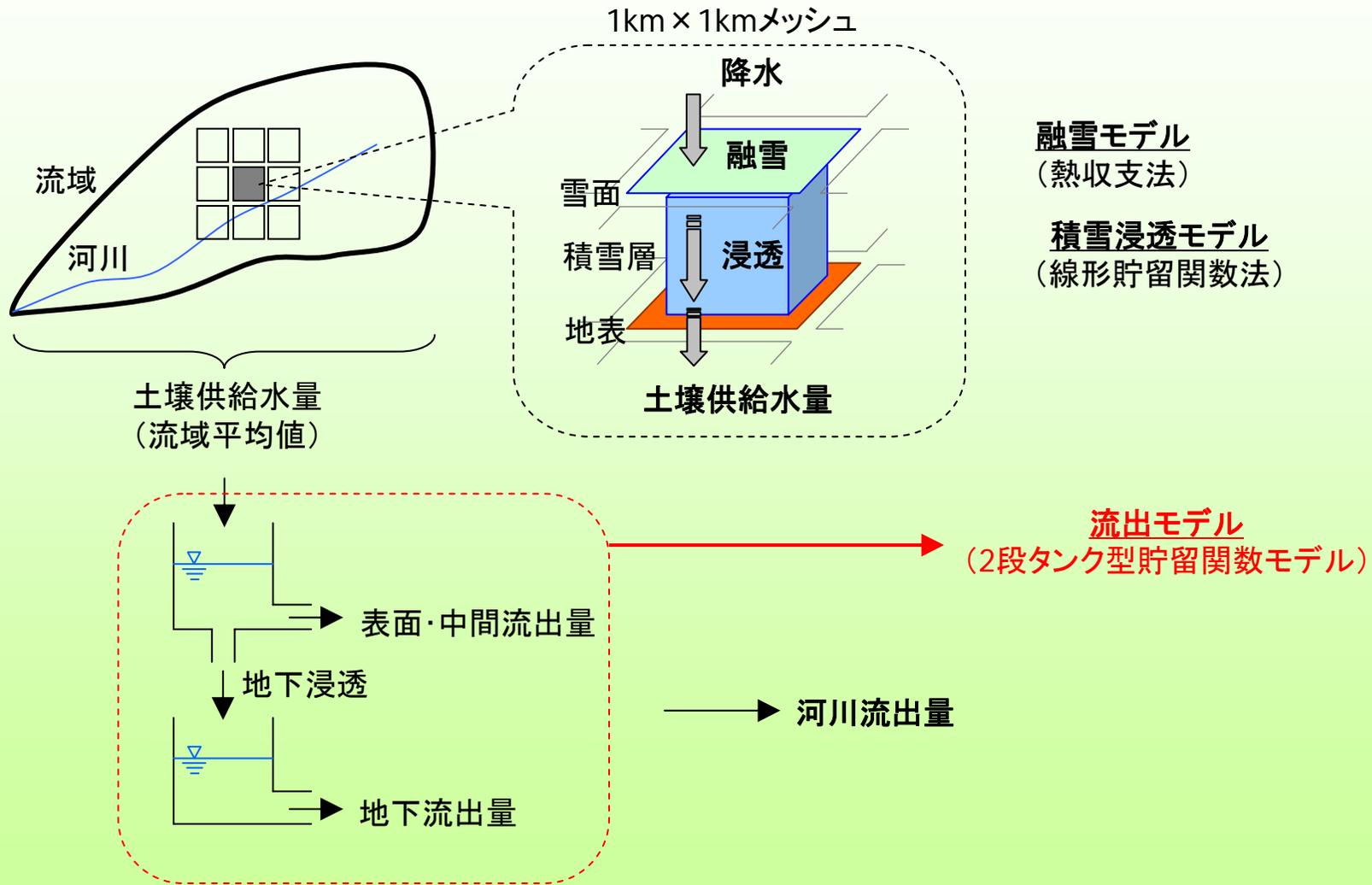


平成18年7月7日 寒地土木研究所
セミナー「近年の気象変化と融雪出水」

融雪と流出機構
貯留型流出モデルの最適化手法

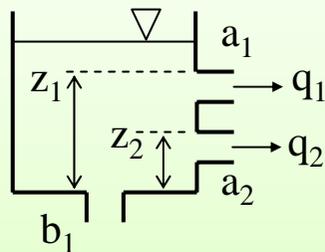
星 清
(財)北海道河川防災研究センター
研究所長・理事

流出モデルへの入力値の算定方法



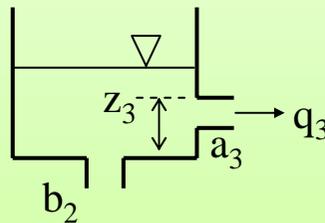
流出に関する計算式(流出モデル)

● 斜面流出 ;タンクモデル



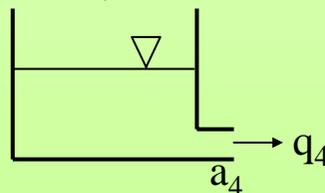
$$\begin{aligned} a_1 &= 0.320 \\ a_2 &= 0.236 \\ z_1 &= 42.00 \\ z_2 &= 4.430 \\ b_1 &= 0.154 \end{aligned}$$

↓ p₁



$$\begin{aligned} a_3 &= 0.027 \\ b_2 &= 0.040 \\ z_3 &= 17.760 \end{aligned}$$

↓ p₂



$$a_4 = 0.089$$

$$\text{斜面流出量} = q_1 + q_2 + q_3 + q_4$$

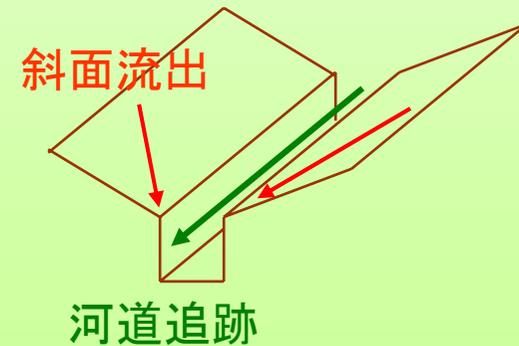
※全メッシュ同じパラメータで計算

● 河道追跡

;kinematic wave式を流量 Q に関する式
に書き換えた式.

$$\frac{\partial Q}{\partial t} + \frac{5}{3} \frac{i^{0.3} Q^{0.4}}{n^{0.6} B^{0.4}} \frac{\partial Q}{\partial x} = 0$$

Q ;流量(m³/s), i ;勾配, n ;粗度(0.05),
 B ;川幅(m), t ;時間(sec), x ;距離(m)



本検討の目的

(1)流出モデルの再検討

- ・洪水流出解析に貯留関数法の採用が圧倒的に多い。
- ・モデル定数の同定が依然として試行錯誤に行われている。
- ・主観的要素を排除する客観的・数学的最適化手法の導入。

(2)PUB対応

- ・多数の既往洪水事例に流出モデルの適用。
- ・実用的最適化手法の採用(たとえば一階ニュートン法)。
- ・モデル定数の総合化(中小河川の洪水ハイドログラフ推定)。
- ・中小河川の洪水予測手法の高度化。
- ・融雪流出モデルの一般化と予測への適用。

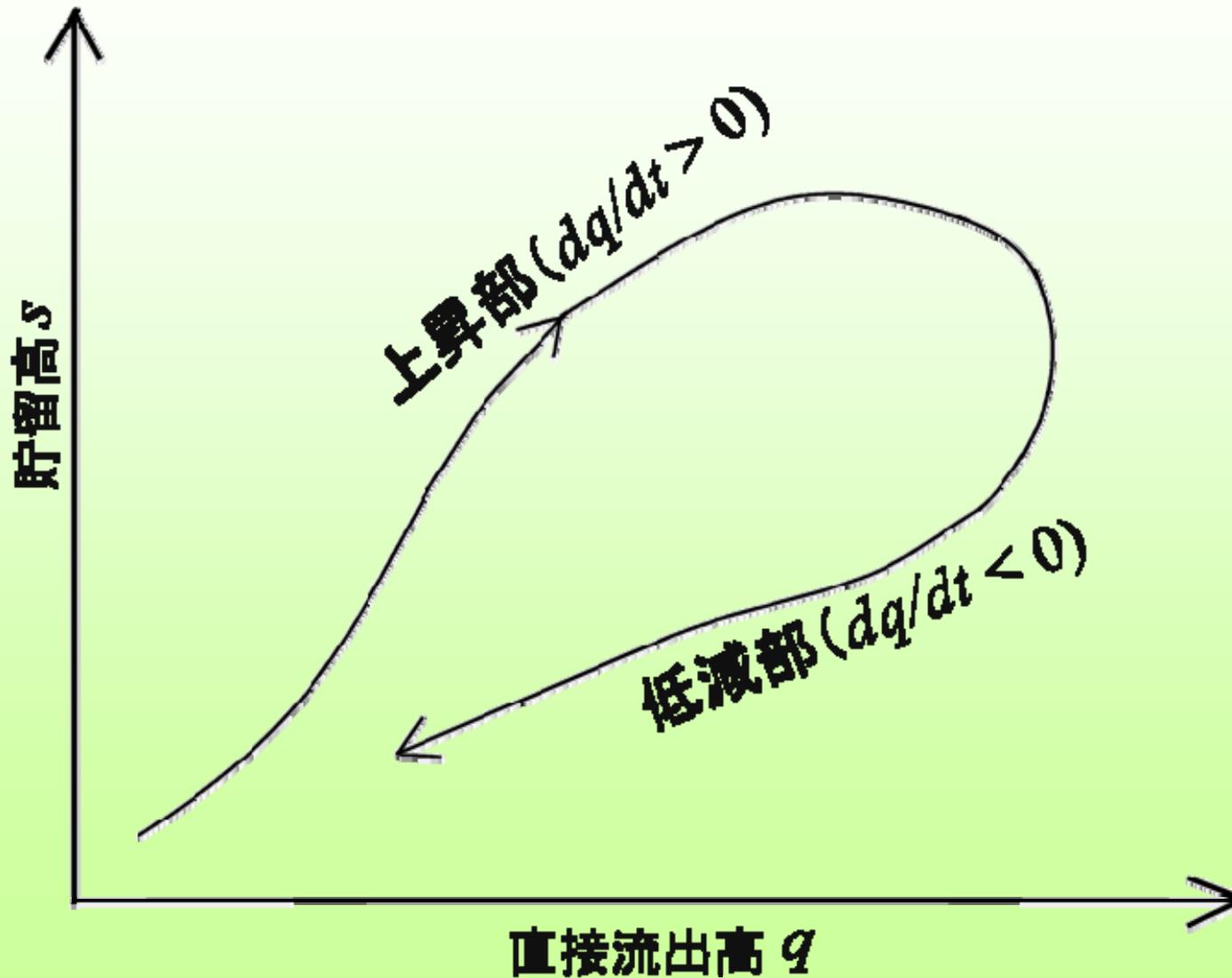
単一流域における解析

- (1) 有効雨量を用いた一般化貯留関数法
- (2) 損失を考慮した貯留関数法
(1段タンク型貯留関数モデル)
- (3) 地下水流出を考慮した貯留関数法
(2段タンク型貯留関数モデル)

複合流域における解析 (流域流出・河道追跡モデル)

- (1) 有効雨量を用いた一般化貯留関数法
- (2) 1段タンク型貯留関数モデル
- (3) 2段タンク型貯留関数モデル

貯留量と流量の2価性



貯留関数法の基本概念

降雨流出過程模式図



$$\frac{ds}{dt} = r(t) - q(t) \quad (\text{連続式})$$

$$s = f(q) \quad (\text{貯留関数方程式})$$

$$(a) \quad s = k_1 q + k_2 \frac{dq}{dt} \quad (\text{線形方程式})$$

$$(b) \quad s = k_1 q^{p_1} + k_2 \frac{d}{dt} (q^{p_2}) \quad (\text{非線形方程式})$$

どんな型式
が適當
か？

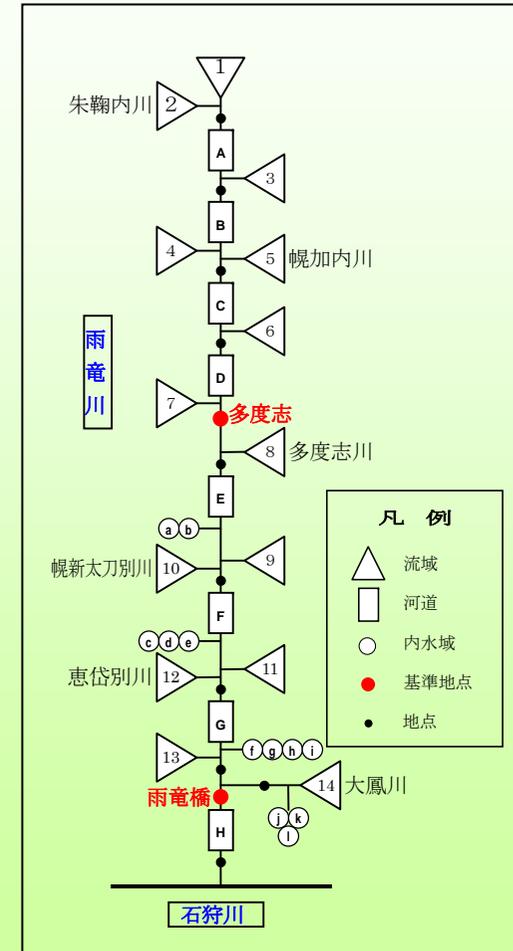
複合流域への適用 (Kinematic waveモデルと貯留関数モデルの比較)

表-1 雨竜川流域における計算諸元

地点	流域面積 (km ²)	河道長 (km)	分割流域数	分割河道数
多度志	996.0	95.2	7	4
雨竜橋	1661.0	120.8	14	7

計算は次の2通りが考えられる。

- (1) 分割流域の流出解析と河道追跡にKinematic wave法を用いる。
- (2) 分割流域の流出解析と河道追跡ともに貯留関数法を用いる。



雨竜川流出計算モデル図

Kinematic wave法 斜面流出（流域流出モデル）

基本方程式

$$\frac{\partial h}{\partial t} + \frac{\partial q_s}{\partial y} = r \quad \dots (1)$$

$$q_s = \beta h^\gamma \quad \dots (2)$$

$$s_s = \int_0^L h(y,t) dy \quad \dots (3)$$

$$h(y,0) = 0 \quad , \quad h(0,t) = 0 \quad \dots (4)$$

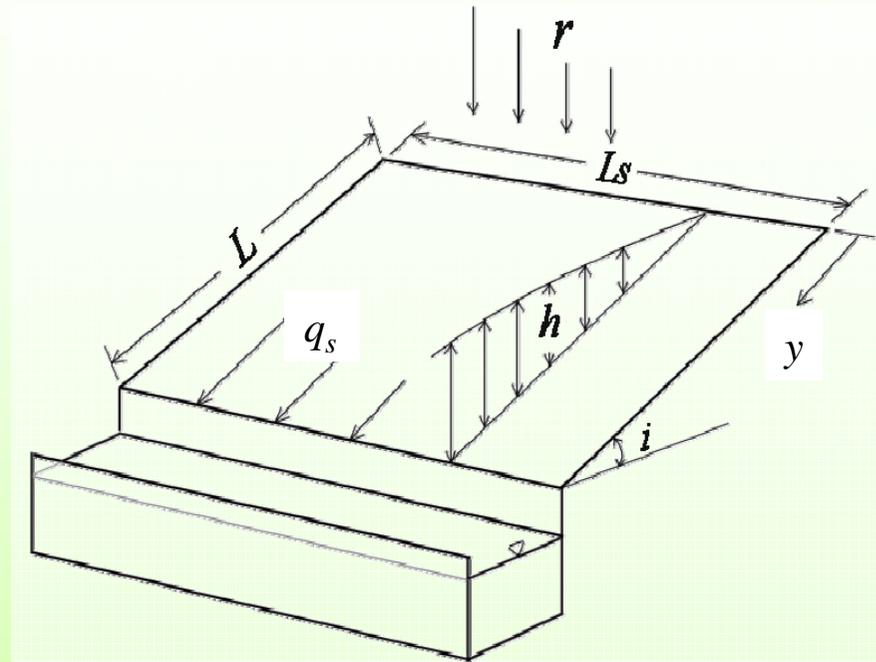


図 一定勾配上の斜面流モデル

ここで、 t ：時間、 y ：斜面上流端からの距離、 h ：水深、 q_s ：斜面単位幅流量、
 s_s ：斜面単位幅貯留量、 r ：有効雨量強度、 L ：斜面長、 β 、 γ ：斜面流定数

(4)式はそれぞれ、水深に関する初期条件と境界条件

Kinematic wave法 河道追跡モデル（横流入がない時）

基本方程式

$$\frac{\partial a}{\partial t} + \frac{\partial q}{\partial x} = 0 \quad \dots (5)$$

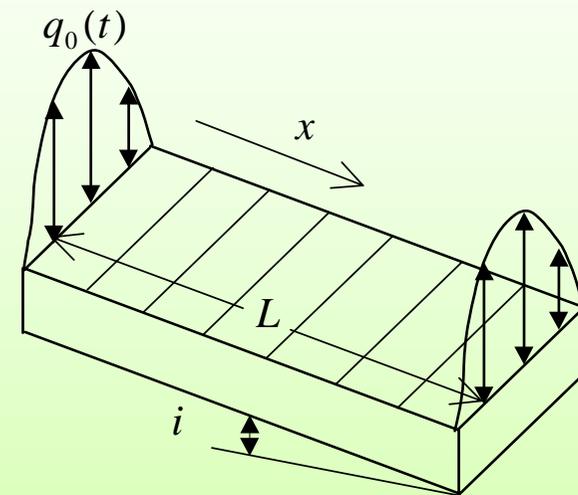
$$a = \alpha q^m \quad \dots (6)$$

$$s = \int_0^L a(x,t) dx \quad \dots (7)$$

$$q(x,0) = 0, \quad q(0,t) = q_0(t) \quad \dots (8)$$

ここで、 t ：時間、 x ：河道距離、 q ：河道流量、 a ：横断面積、 α 、 m ：河道流定数

(8)式はそれぞれ、流量に関する初期条件と**上流端境界条件**



図一2 河道流モデル

複合流域(流域・河道追跡)モデル

流域流出モデル

Kinematic wave法

↓ 集中化

貯留関数法

未知定数3個

河道追跡モデル

Kinematic wave法

↓ 集中化

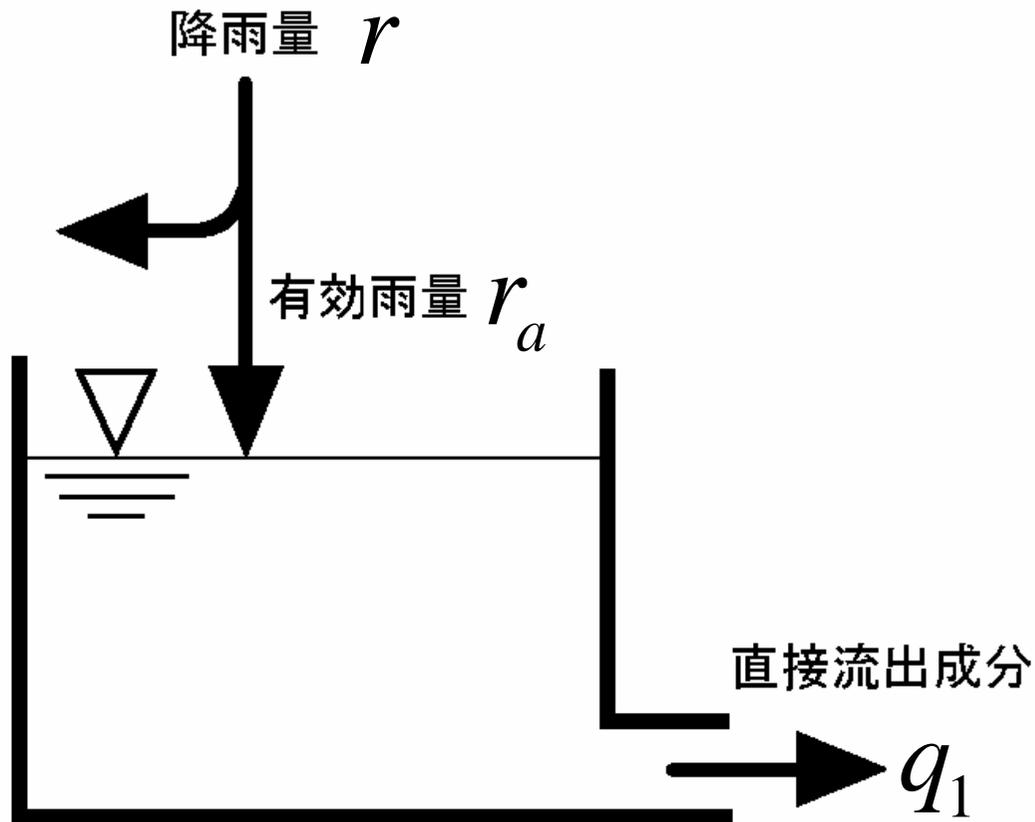
貯留関数法

6個のモデル定数既知

+

貯留関数モデル(1)

有効雨量を用いた一般化貯留関数法



$$\begin{cases} s = k_1 q_1^{p_1} + k_2 \frac{d}{dt} (q_1^{p_2}) \\ \frac{ds}{dt} = r_a - q_1 \\ \begin{cases} p_1 = 0.6 \\ p_2 = 0.4648 \end{cases} \\ \begin{cases} k_1 = 2.8235 f_c A^{0.24} \\ k_2 = 0.2835 k_1^2 \bar{r}_a^{-0.2648} \end{cases} \\ f_c = (n / \sqrt{i})^{0.6} \end{cases}$$

雨量・流出成分の分離が必要(主観的)

モデルパラメータ

$$\begin{cases} k_1 = 2.8235 f_c A^{0.24} \\ k_2 = 0.2835 k_1^2 \bar{r}_a^{-0.2648} \\ f_c = (n / \sqrt{i})^{0.6} \end{cases}$$

k_1, k_2 : 貯留係数

f_c : 損失係数

A : 流域面積 (km²)

\bar{r}_a : 平均有効雨量強度 (mm/h)

n : 等価粗度 (s/m^{1/3})

i : 斜面勾配

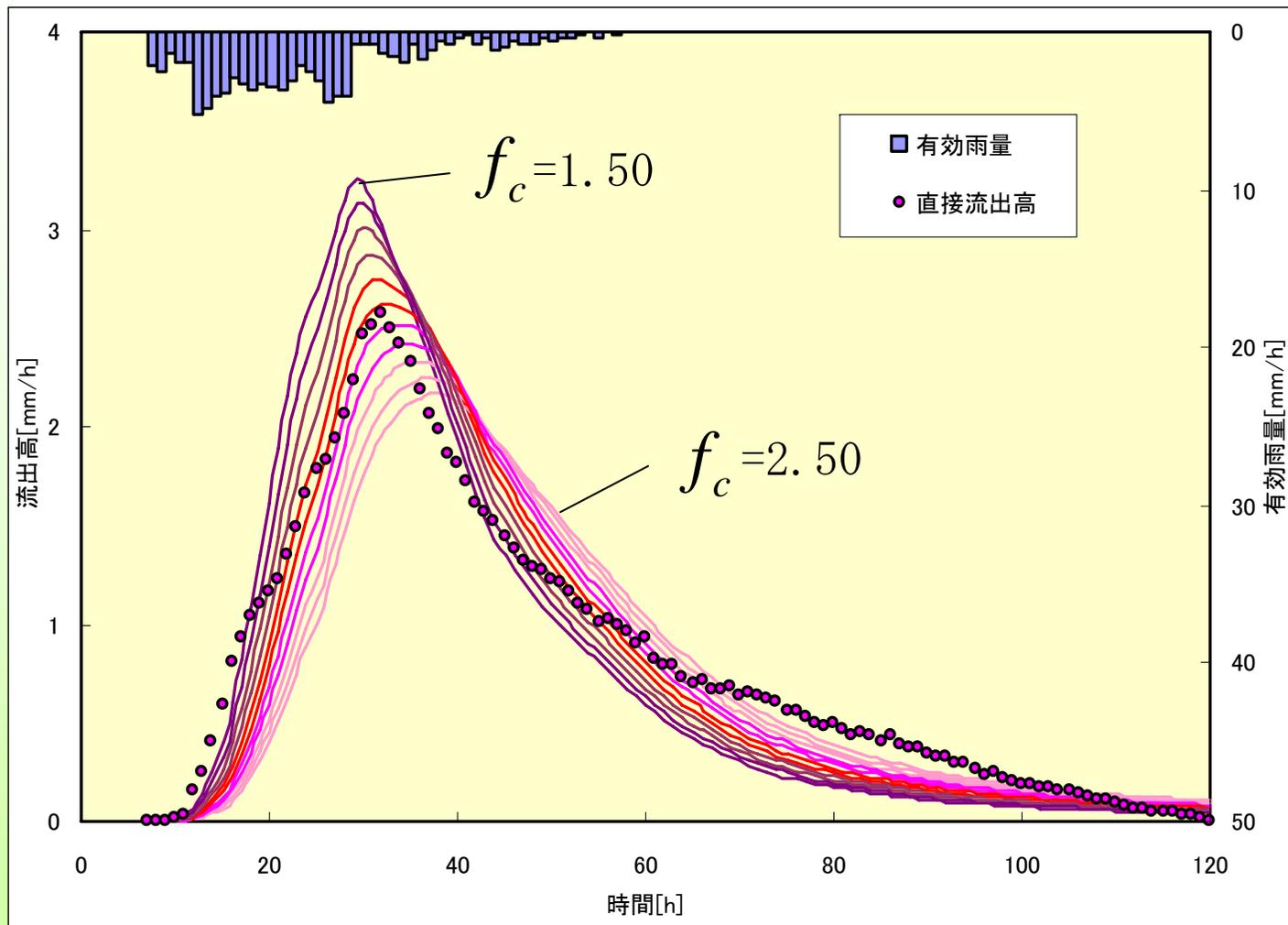
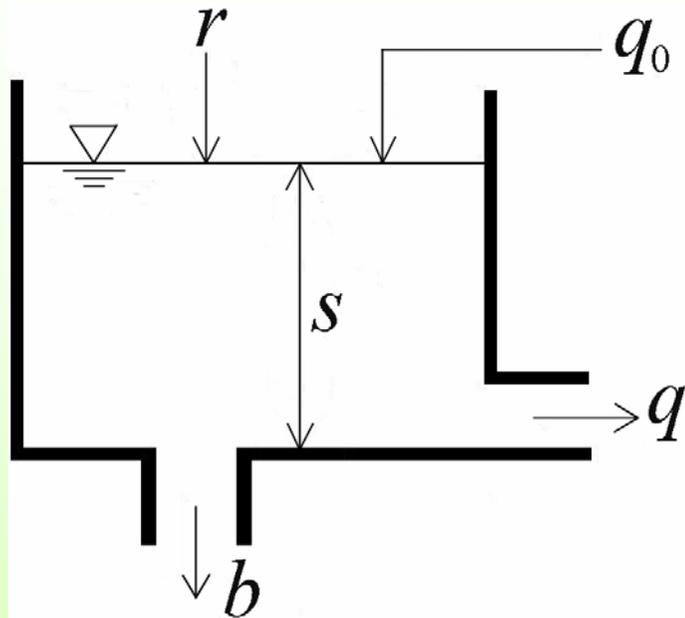


図-12 ファクターが再現ハイドログラフに与える影響

貯留関数モデル（Ⅱ）



損失項を含む貯留関数法
= 1段タンク型貯留関数モデル

s : 貯留高(mm)

r : 観測雨量(mm/h)

q : 観測流出高(mm/h)

b : 損失高(mm/h)

q_0 : 基底流出高(mm/h)

q_B : 初期流出高(mm/h)

k_{11}, k_{12} : 貯留係数

k_{13} : 損失係数

p_1, p_2 : 貯留指数

λ (=0.019) : 減衰係数

(標準逓減曲線 ; 既往解析結果)

$$\begin{cases} s = k_{11} q^{p_1} + k_{12} \frac{d}{dt} (q^{p_2}) & \begin{cases} p_1 = 0.6 \\ p_2 = 0.4648 \end{cases} \\ \frac{ds}{dt} = r - q - b + q_0 \\ b = k_{13} q \\ q_0 = q_B \exp(-\lambda t) \end{cases}$$

モデルパラメータ

$$\begin{cases} k_{11} = c_{11} A^{0.24} \\ k_{12} = c_{12} k_{11}^2 (\bar{r})^{-0.2648} \\ c_{13} = 1 + k_{13} \end{cases}$$

k_{11}, k_{12} : 貯留係数

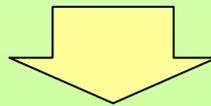
k_{13} : 損失係数

A : 流域面積(km²)

\bar{r} : 平均雨量強度(mm/h)

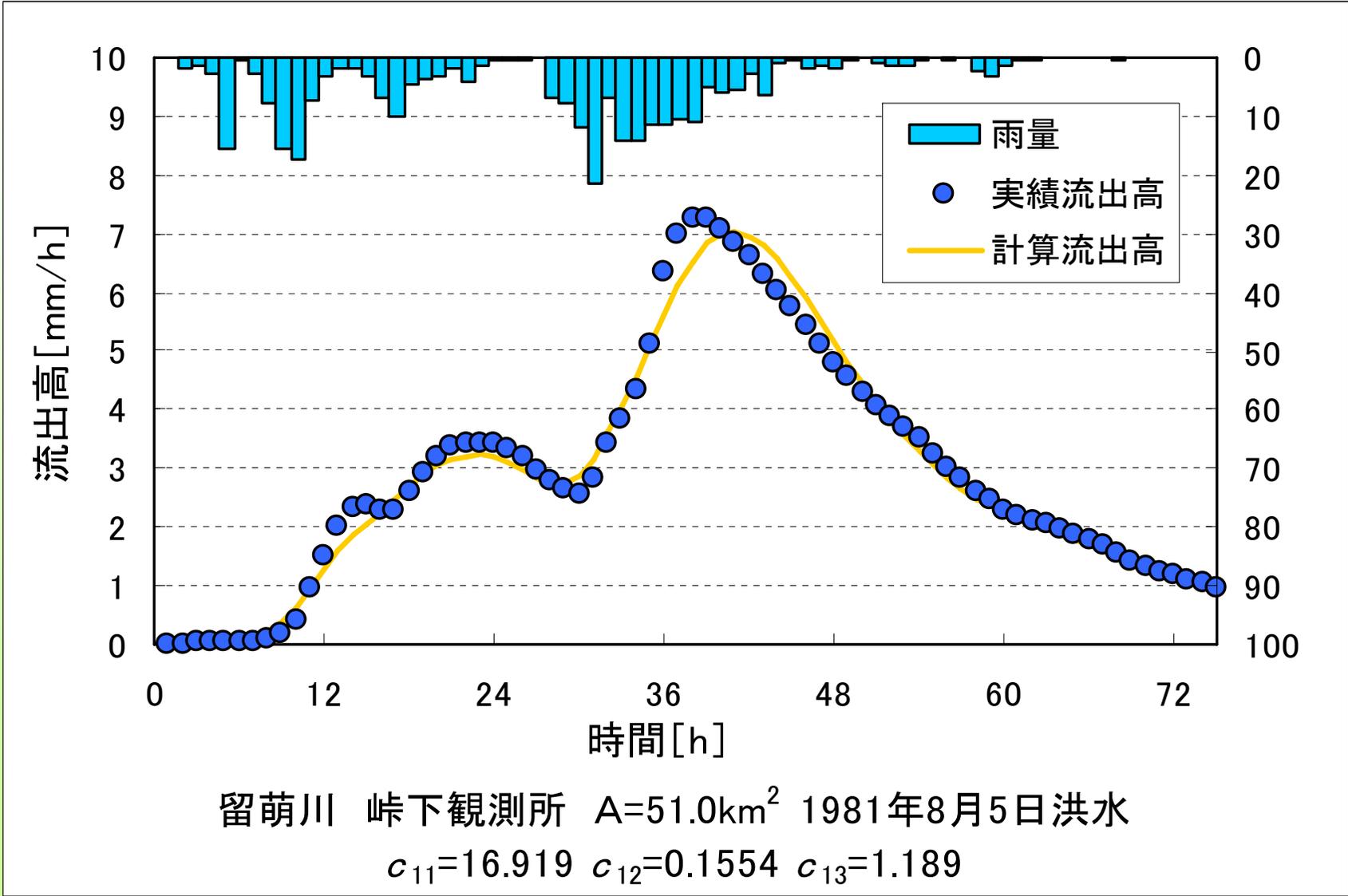
c_{11}, c_{12}, c_{13} : 未知定数

流域面積・降雨特性に影響されないパラメータとする



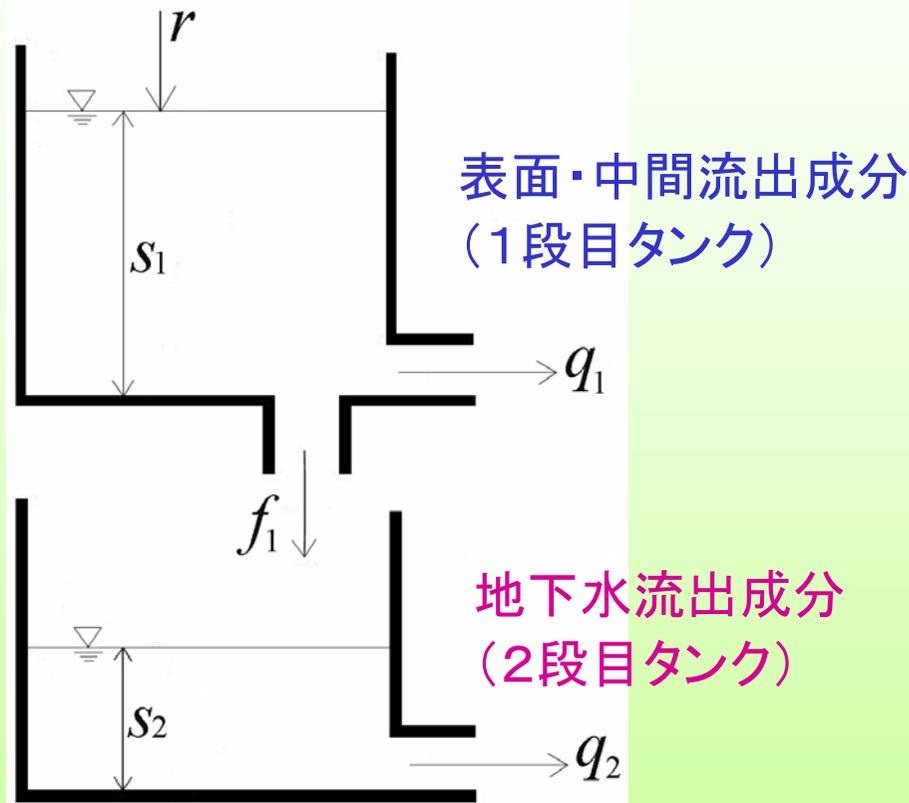
総合化が可能

解析結果例 2



貯留関数モデル (Ⅲ)

2段タンク型貯留関数モデル



$$\begin{cases} s_1 = k_{11}q_1^{p_1} + k_{12} \frac{d}{dt}(q_1^{p_2}) \\ \frac{ds_1}{dt} = r - q_1 - f_1 \\ f_1 = k_{13}q_1 = k_{13}(q - q_2) \end{cases}$$

$$\begin{cases} p_1 = 0.6 \\ p_2 = 0.4648 \end{cases}$$

$$\begin{cases} s_2 = k_{21}q_2 + k_{22} \frac{dq_2}{dt} \\ \frac{ds_2}{dt} = f_1 - q_2 \end{cases}$$

q_1 : 表面・中間流出高(mm/h)、 q_2 : 地下水流出高(mm/h)
 r : 観測雨量(mm/h)、 f_1 : 浸透供給量(mm/h)、 s_1, s_2 : 貯留高(mm)
 p_1, p_2 : 貯留指数、 $k_{11}, k_{12}, k_{13}, k_{12}, k_{22}$: 貯留係数

モデルパラメータ (上段タンク)

$$\begin{cases} k_{11} = c_{11} A^{0.24} \\ k_{12} = c_{12} k_{11}^2 (\bar{r})^{-0.2648} \\ f_1 = k_{13} q_1 \\ \quad = k_{13} (q - q_2) \\ c_{13} = k_{13} + 1 \end{cases}$$

k_{11}, k_{12}, k_{13} : 貯留係数

c_{11}, c_{12}, c_{13} : 未知定数

A : 流域面積(km²)

\bar{r} : 平均雨量強度(mm/h)

f_1 : 浸透供給量(mm/h)

q : 全流出高(mm/h)

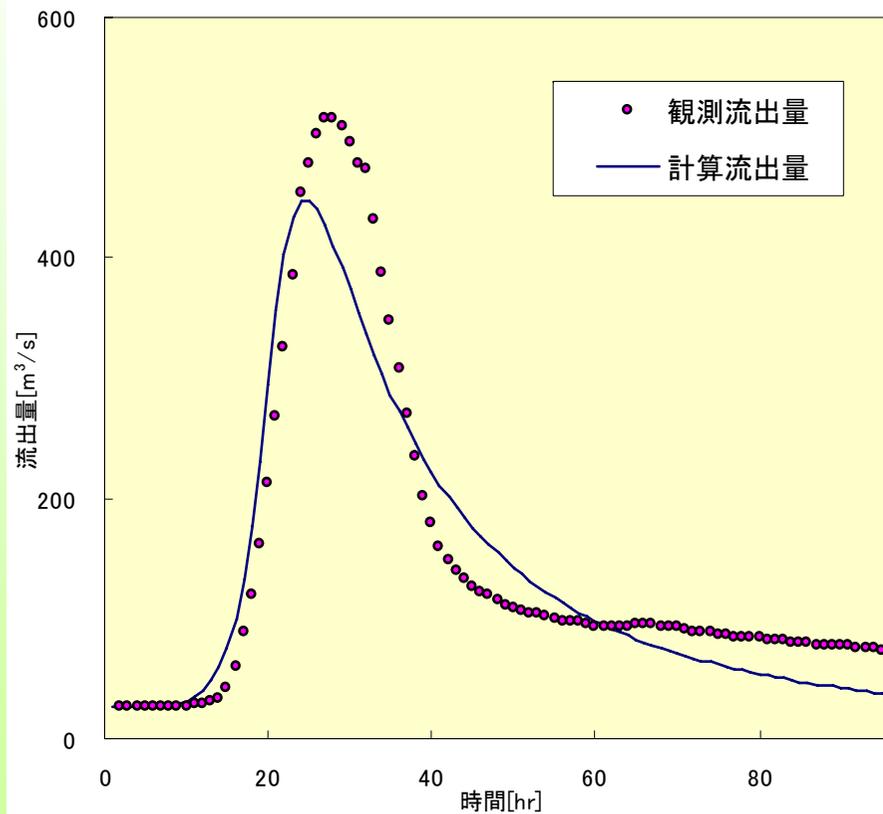
q_1 : 表面・中間流出高(mm/h)

q_2 : 地下水流出高(mm/h)

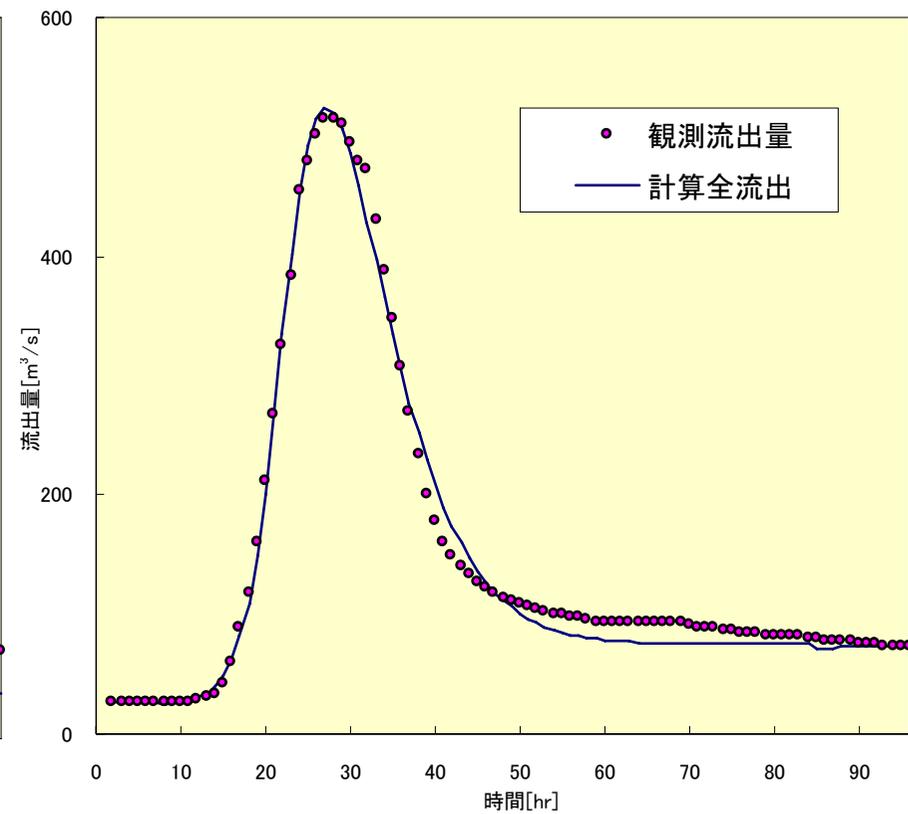
浸透供給量 f_1 は、浸透により地下水流出成分 (下段タンク) となる雨量成分

再現グラフの比較

2段タンク型モデルにより、洪水再現性が向上



1段タンク型モデル



2段タンク型モデル

数学的最適化手法(1)

(1)目的関数

$$J(K) = MSE = \frac{1}{N} \sum_{m=1}^N e_m^2$$

平均二乗誤差

MSE(Mean Squares Error)

の最小化

$$e_m = q_m^* - q_m(K) \quad ; \text{誤差項}$$

$$K = [k_1 \quad k_2 \quad k_3]^T \quad ; \text{モデル定数ベクトル}$$

q_m^* : 観測流量 $q_m(K)$: 計算流量 N : 標本数

数学的最適化手法(2)

(a)一階ニュートン法

誤差項を1次の項までテーラー展開、 $\frac{\partial q_m}{\partial K}$ が必要

(b)二階ニュートン法(ベイリー法)

誤差項を2次の項までテーラー展開、 $\frac{\partial q_m}{\partial K}$ と $\frac{\partial^2 q_m}{\partial K^2}$ が必要

(c)ダビドン法

目的関数を2次の項までテーラー展開、 $\frac{\partial q_m}{\partial K}$ と $\frac{\partial^2 q_m}{\partial K^2}$ が必要

(1)システム方程式

$$\begin{cases} \frac{dx_1}{dt} = f_1(x_2) \\ \frac{dx_2}{dt} = f_2(x_1, x_2, k_1, k_2, k_3, r) \end{cases}$$

状態変量ベクトル: $X = [x_1 \quad x_2]^T$

モデル定数ベクトル: $K = [k_1 \quad k_2 \quad k_3]^T$

システム入力(降雨量): r

$$x_1 = q^{p_2}, \quad x_2 = \frac{d}{dt}(q^{p_2})$$

(2)線形近似解法

$$\frac{dX}{dt} = AX + D$$

$$A = \begin{bmatrix} 0 & 1 \\ a_1 & a_2 \end{bmatrix}, \quad D = \begin{bmatrix} 0 \\ d \end{bmatrix}$$

$$a_1 = \frac{\partial f_2}{\partial x_1}, \quad a_2 = \frac{\partial f_2}{\partial x_2}, \quad d = f_2 - a_1 x_1 - a_2 x_2$$

(3)一次感度方程式の解法

$$\frac{d}{dt} \begin{bmatrix} U_1 \\ U_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & I \\ a_1 I & a_2 I \end{bmatrix} \begin{bmatrix} U_1 \\ U_2 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} B_1 \\ B_2 \end{bmatrix}$$

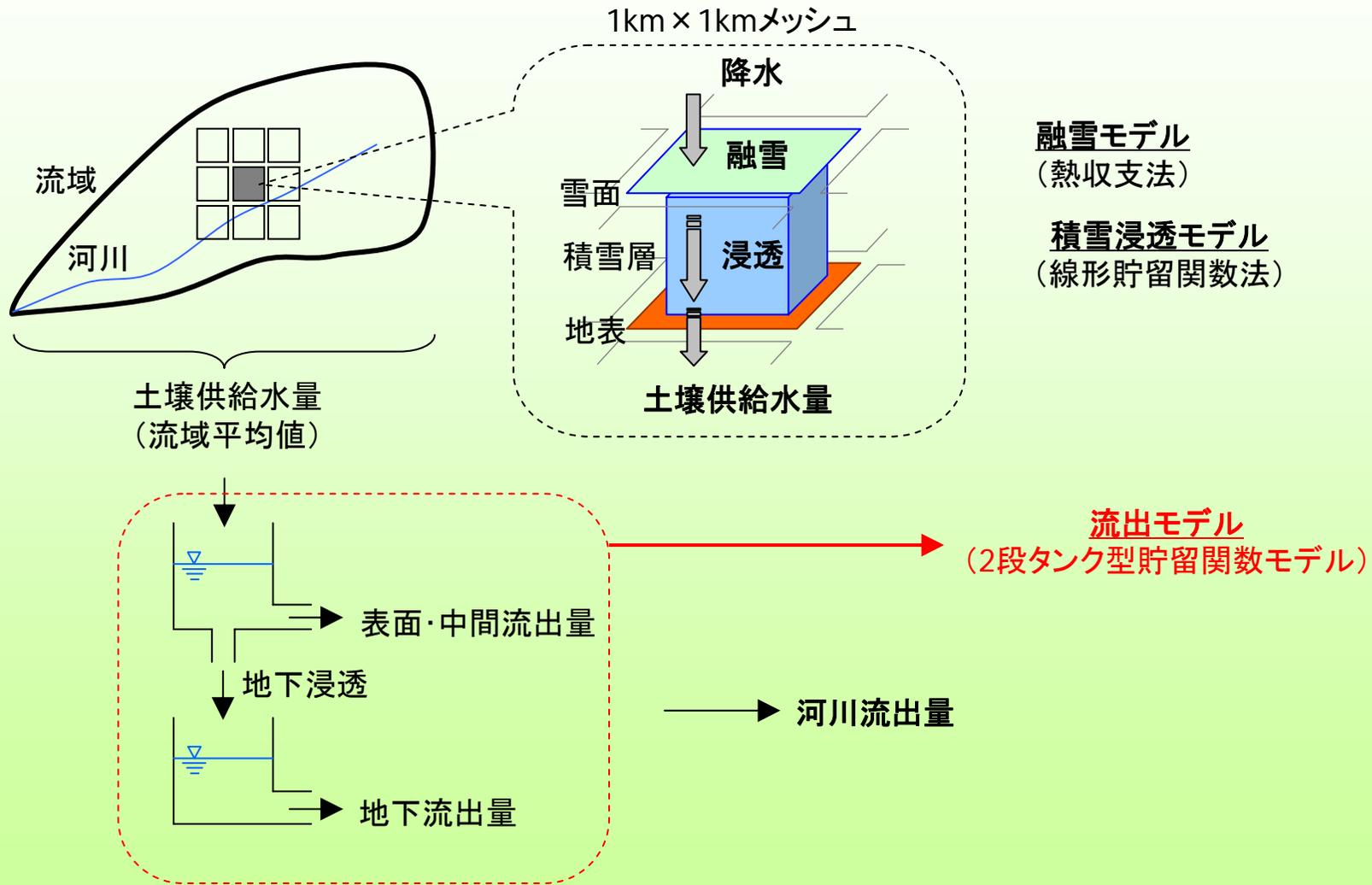
$$U_1 = \begin{bmatrix} \frac{\partial x_1}{\partial k_1} & \frac{\partial x_1}{\partial k_2} & \frac{\partial x_1}{\partial k_3} \end{bmatrix}^T, \quad U_2 = \begin{bmatrix} \frac{\partial x_2}{\partial k_1} & \frac{\partial x_2}{\partial k_2} & \frac{\partial x_2}{\partial k_3} \end{bmatrix}^T$$

$$B_1 = [0 \quad 0 \quad 0]^T, \quad B_2 = \begin{bmatrix} \frac{\partial f_2}{\partial k_1} & \frac{\partial f_2}{\partial k_2} & \frac{\partial f_2}{\partial k_3} \end{bmatrix}^T$$

I : $[3 \times 3]$ の単位行列

U_1 : 一次感度係数ベクトル(一次導関数ベクトル)

流出モデルへの入力値の算定方法



2段タンク型貯留関数モデル

◆1段目タンク

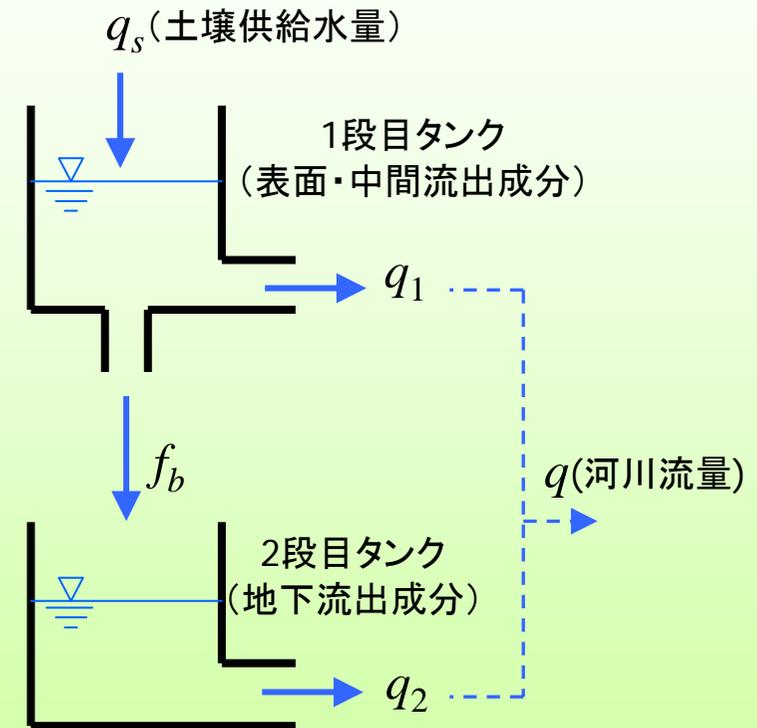
$$\begin{cases} s_1 = k_{11}q_1^{p_1} + k_{12} \frac{d}{dt}(q_1^{p_2}) \\ \frac{ds_1}{dt} = q_s - q_1 - f_b \\ f_b = (c_3 - 1)q_1 \end{cases}$$

$$\begin{cases} p_1 = 0.6, p_2 = 0.4648 \\ k_{11} = c_1 A^{0.24}, k_{12} = c_2 k_{11}^2 (\bar{q}_s)^{-0.2648} \end{cases}$$

◆2段目タンク

$$s_2 = k_{21}q_2 + k_{22} \frac{dq_2}{dt}, \frac{ds_2}{dt} = f_b - q_2$$

$$k_{21} = 0.0617c_4 A^{0.4}, k_{22} = 0.4k_{21}^2$$

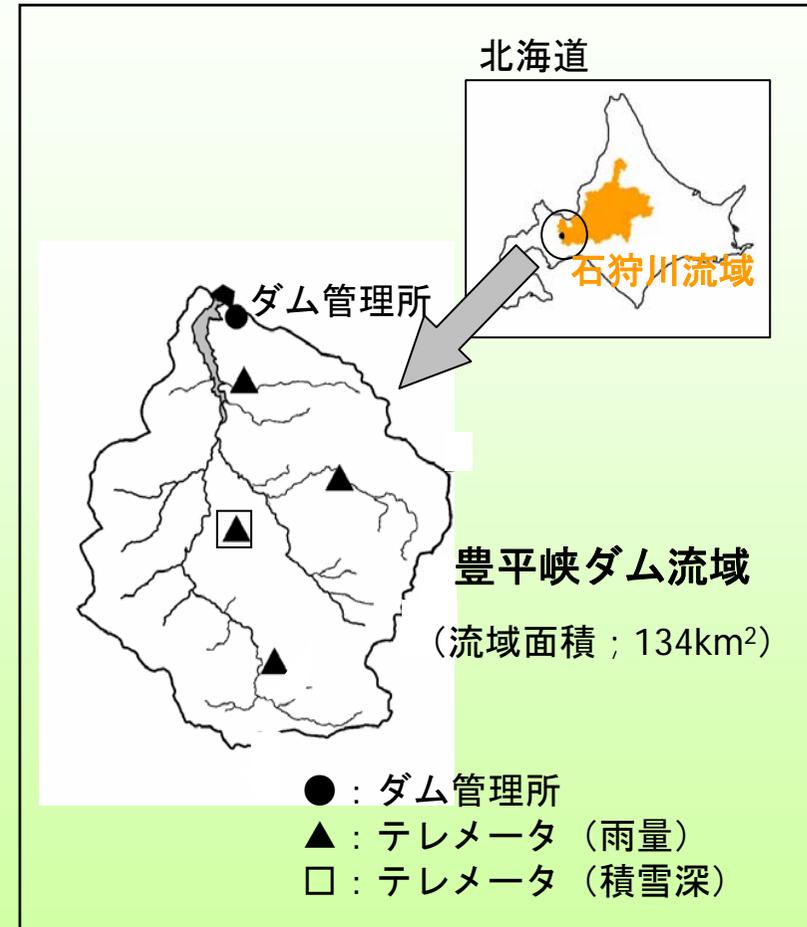


s_1, s_2 : 1段目, 2段目タンクの貯留高(mm), q_1, q_2 : 表面・中間流出成分, 地下流出成分の流出高(mm/h), q_s : 土壌供給水量(mm/h), f_b : 1段目タンクから2段目タンクへの浸透供給量(mm/h), $k_{11}, k_{12}, k_{21}, k_{22}$: 貯留係数, p_1, p_2 : 貯留指数, A : 流域面積(Km²), \bar{q}_s : 土壌供給水量の平均強度(mm/h).

未知定数: c_1, c_2, c_3, c_4 → 感度係数を解析的に算定し, Newton-Raphson法によって最適化.

対象流域

- 豊平峡ダム流域(北海道札幌市)
- 流域の標高分布
: 400~1,300m, 全体の50%は700~900m.
- 積雪期間
: 11月下旬~翌年5月中旬の約6ヶ月間.
- 融雪に伴う増水期間
: 4月中旬~5月下旬.
- 降雪量(雨量に換算した値)
: 約1,000mm. 年間降水量の50%程度が降雪.
- 解析期間 : 1996年~2000年, 4月~6月

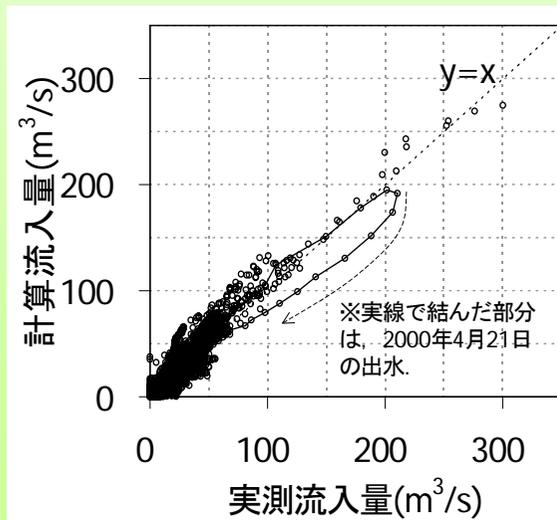
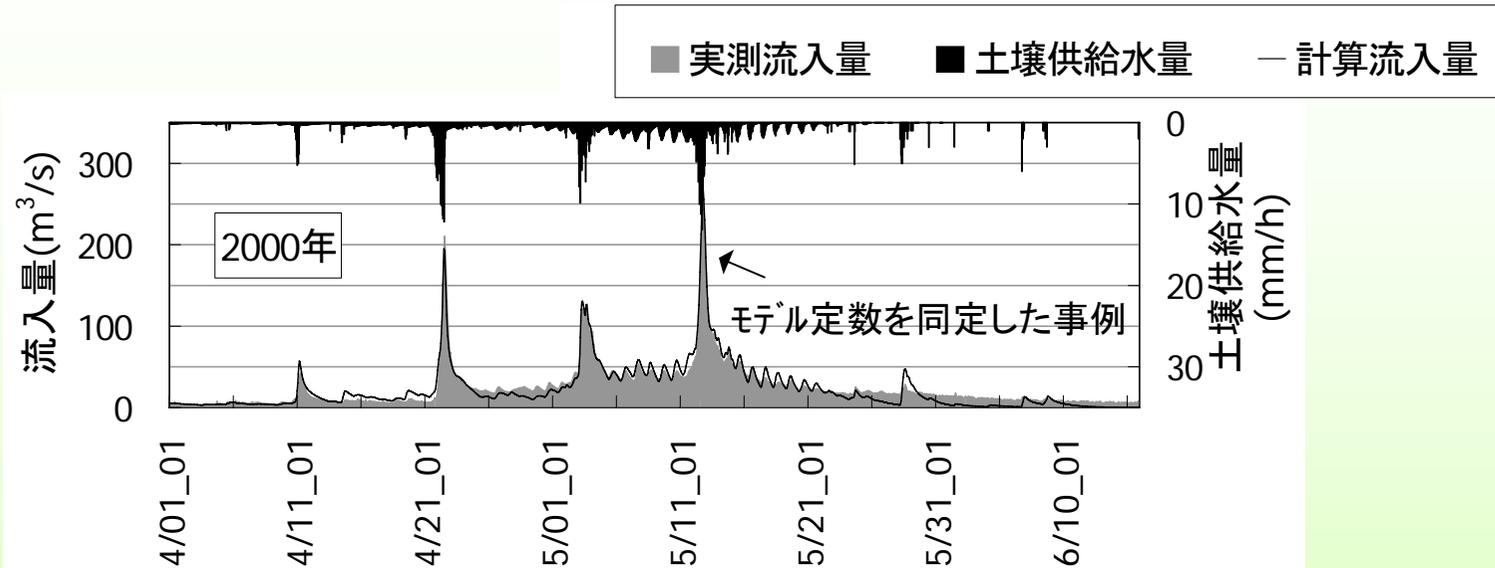


◆ダム管理所での気象観測項目◆

気温, 湿度, 風向風速, 積雪深, 降水量, 現地気圧

(日射量・日照時間: 近傍地点の値で代用)

再現結果1



実測流入量と計算流入量の時系列比較
(1996年～2000年)

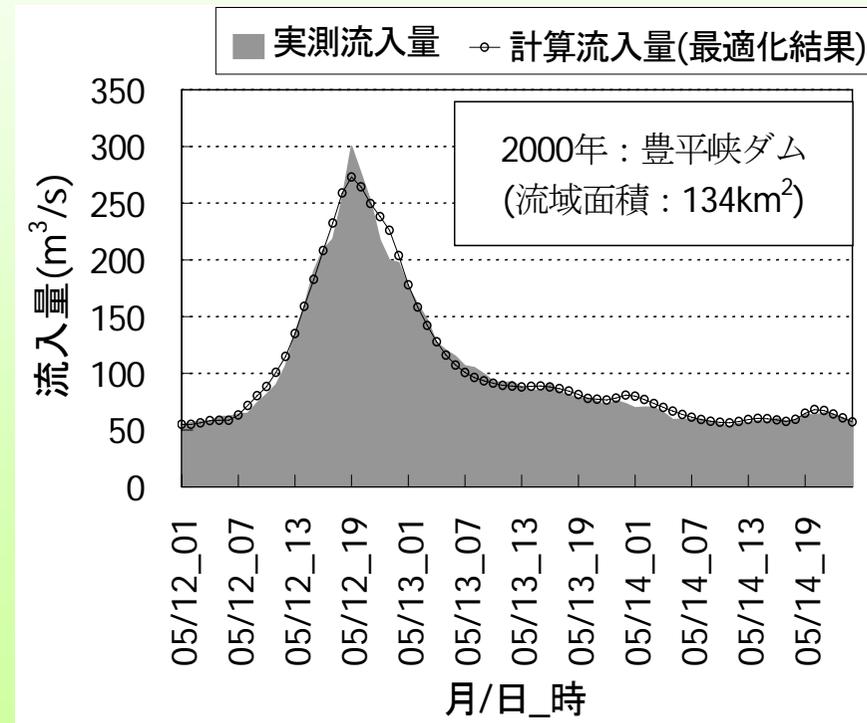
モデル定数の最適化結果

流出モデル定数の探索過程

No	c_1	c_2	c_3	c_4	J(K)
1	5.0000	0.1500	1.5000	100.0000	0.225
2	5.8240	0.1186	1.4001	84.0916	0.085
3	6.4839	0.0812	1.3267	71.0002	0.040
4	6.6233	0.0622	1.3194	64.2785	0.035
5	6.4925	0.0641	1.3392	61.3444	0.035
6	6.4131	0.0690	1.3501	60.2293	0.035
7	6.3948	0.0707	1.3526	59.8259	0.035
8	6.3912	0.0710	1.3531	59.6994	0.035
9	6.3895	0.0710	1.3534	59.6578	0.035
10	6.3884	0.0711	1.3535	59.6427	0.035

最適モデル定数による再現ハイドログラフ

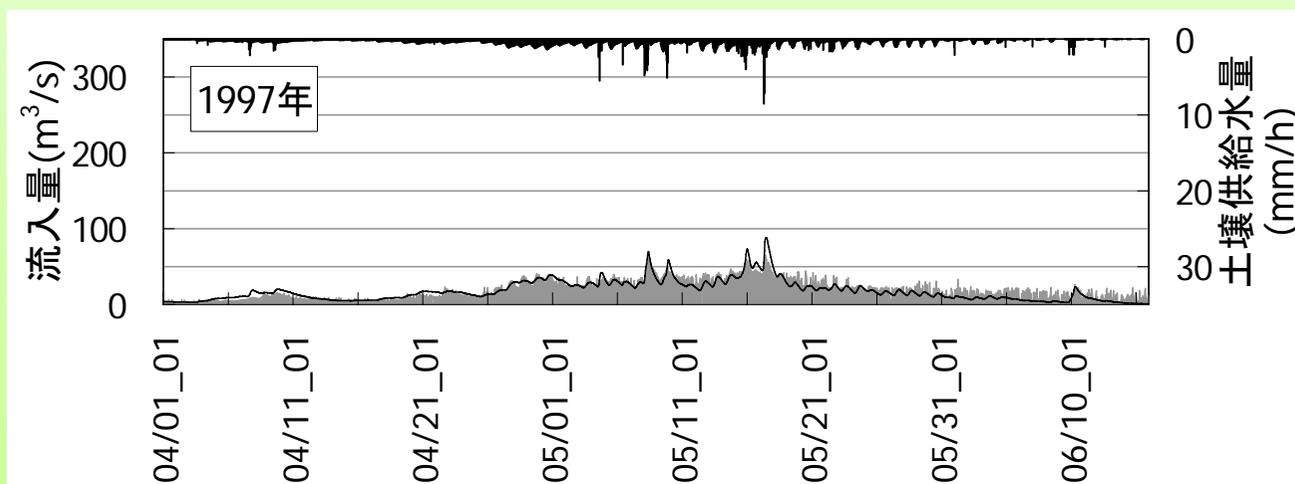
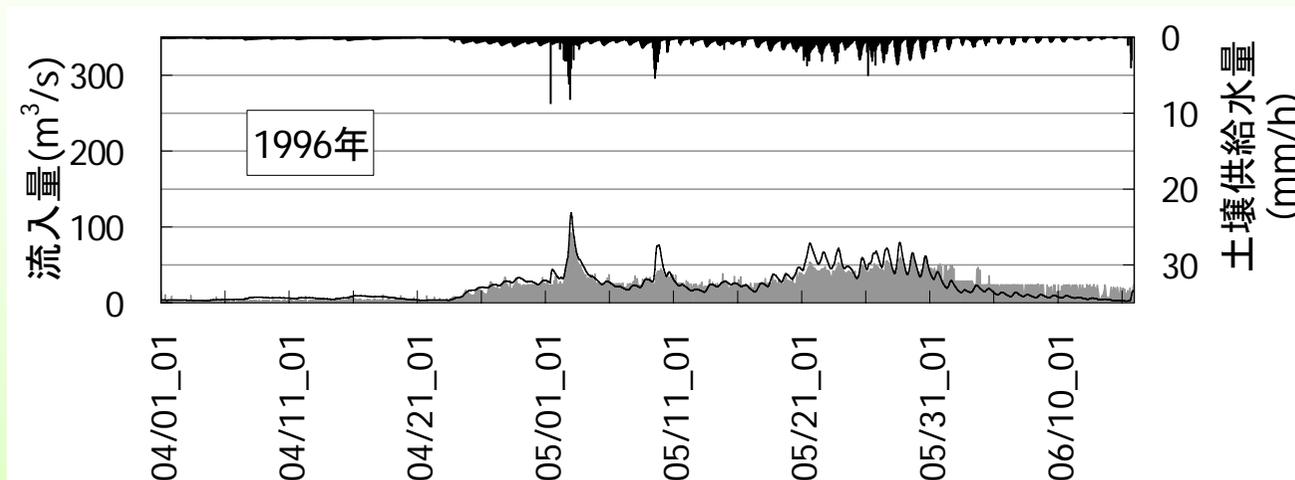
(1996年～2000年の最大の出水)



→このモデル定数を使い5カ年のハイドログラフを再現。
(モデル定数の代表性の検証)

再現結果2

■ 実測流入量 ■ 土壌供給水量 — 計算流入量



再現結果3

■ 実測流入量 ■ 土壌供給水量 — 計算流入量

